

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	朱 仁 媛
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">韓国人日本語学習者の日本語文章の音読における記憶過程 —ワーキングメモリ理論を枠組みとした実験的検討—</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	松 見	法 男
審査委員	教 授	酒 井	弘
審査委員	教 授	深 澤	清 治
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、第二言語の学習・指導法として用いられている音読を取り上げ、韓国語を母語とする上級の日本語学習者における、文章音読時の表現形態と意味内容の記憶を支える認知メカニズムを、ワーキングメモリ（working memory）理論を枠組みとして実験的に検討することを目的とする。第二言語としての日本語文章の音読における記憶過程について議論し、仮説モデルの提案を目指す。</p> <p>論文の構成は以下のとおりである。</p> <p>第1章では、文章音読時の記憶過程がワーキングメモリの働きと深く関わることを説明した。そして、母語としての日本語の文章記憶研究に基づき、第二言語の文章音読における記憶過程を、ワーキングメモリ理論を枠組みとして探究することによって、認知的現象の解釈がより妥当なものとなる可能性について言及した。</p> <p>第2章では、第二言語としての日本語の音読時における文章記憶の研究を概観し、日本語の文章を音読した後に学習者の心内に形成される記憶表象のあり方について、状況モデルを中心に、どのような結果が得られているかを吟味した。その上で、記憶表象のあり方を確認するだけでは、音読時の記憶過程の検討が不十分になることを述べた。音読時の文章記憶を、特に意味内容の記憶を何が促進させるかについて、音読時のデコーディング（decoding）過程と理解過程に寄与する認知的要因（デコーディングの効率性、ワーキングメモリ容量の大きさ、注意配分）の重要性に着目し、それらを扱った先行研究での知見と問題点を踏まえ、本研究の課題を提示した。</p> <p>第3章では、上級の韓国人日本語学習者を対象とした4つの実験を行い、音読時における文章記憶過程が、どのような認知メカニズムに基づいているかを検討した。</p> <p>実験1では、音読と黙読を比較した。その結果、文章の表現形態の記憶では音読が黙読よりも優位であるが、意味内容の記憶では音読が黙読よりも劣位であることがわかった。第二言語の文章音読においても、ワーキングメモリ内の音韻ループの働きおよび中央制御部における処理資源の配分の仕方が、記憶成績に影響を及ぼすことが示唆された。</p> <p>実験2では、音読課題と文章記憶課題を採用し、日本語の流暢な音読が、文章記憶を促進させるか否かを調べた。学習者が音読した音声を、流暢さを表す6つの指標に基づいて</p>			

評価し、その評価と文章記憶課題の成績との相関関係を見た。その結果、いずれの指標でも文章記憶課題の得点との間で相関は認められなかった。第二言語の流暢な音読は、文章理解の必須条件であるが、「ディコーディングの効率性が高い場合は文章の記憶成績も高い」とはいえないことが明らかとなった。

実験3では、音読課題と3つの文章記憶課題を採用し、ワーキングメモリ容量の大群と小群の間で文章の記憶成績に差が生じるか否かを調べた。その結果、音読時の意味内容の記憶が、特に個々の詳細情報の保持や未知語の意味推測の度合いが、学習者のワーキングメモリ容量の大小によって影響を受ける可能性が高いことが示された。

実験4では、学習者要因としてワーキングメモリ容量（大、小）を、材料要因として文章の難易度（難、易）を、そして課題遂行に関する要因として音読の種類（微音読、音読）を設定し、これらの要因が文章音読時の意味内容の記憶にどのような影響を及ぼすかを調べた。その結果、ワーキングメモリ容量、文章の難易度、音読の種類の3つの要因は、それぞれ独立要因として、文章音読時の意味内容の記憶に影響を及ぼすことがわかった。また、ワーキングメモリ容量の大小によって、音読時の意味理解への注意配分や、意味内容の記憶に対する文章の難易度の関わり方が異なることがわかった。

第4章では、実験1から実験4までのまとめを行うとともに、4つの実験結果に基づき、Baddeley（2000）が提唱したワーキングメモリモデルを枠組みとして、韓国語を母語とする上級の日本語学習者に対応した日本語文章の音読過程モデルを構築・提案した。そして、日本語教育への示唆と今後の課題を述べた。

本論文は以下の3点で高く評価できる。

1. 第二言語としての日本語の文章を音読または黙読した後に、学習者の心内に形成される記憶表象のあり方について、状況モデルを中心にその性質をまとめ、状況モデルの各段階での記憶表象の形成過程とワーキングメモリとの関わりについて、特徴を解析した。
2. 文章音読時のディコーディング過程と理解過程に寄与する認知的要因の重要性に着目した実験を行い、第二言語では、流暢な音読が文章理解の必須条件となるものの、音読が流暢であっても、音読した文章の意味内容の記憶が必ずしも促進されるとはいえないことを実証した。
3. ワーキングメモリ理論を枠組みとして、日本語学習者の音読時の認知メカニズムを探るための実験的検討を重ね、韓国語を母語とする上級日本語学習者の音読過程モデルを構築・提案した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成26年2月14日